



—才2号発刊にあたり—

幹事 土井孝訓

地球始って以来、そしてこの地球の続く限り、生物はあらゆる環境に於て進化し、退化して行く。我々は此の
大なる循環の中に一步でも近づく事を欲している。と同時に
此の欲している心を誇りとしている。学生にとって真理を
求める心にこそ最上美である。今我々は真理への一步をこの
ユーカリに発表出来る事を誇りとしている。

若くして学ばざるものは
過去を失い

未来に死せるものなり

(エウソピデス)



目 次

1.	文化祭をかえりみて	小田切慶一	1.	
2.	ユーカリ発刊前後の思い出	高原道男	2.	
3.	英彦山の生物		6.	
4.	英彦山採集旅行回想録	藤井邦彦	7.	
5.	ハツカネズミの遺伝実験について	竹岡 修	17.	
6.	シチメン草	{	土井 孝訓 福間 純夫 石田 愷	25.
7.	郷土の貝			{
8.	ハツカネズミの学習曲線	{	黒内 谷明子 内 田 玲子	
9.	アサガオの奇形について			山岡 誠
10.	郷土の生物	{	石未 雪子 作間 礼子 滝山 竜子	33.
11.	稲の水耕			{
12.	葉脈の作り方	浅田 喜久子	36.	
13.	海藻採集について	太田国光	37.	
14.	空中の細菌	波多野志信	39.	
15.	下垂体前葉と甲状腺との関係について	山岡 誠	41.	
16.	なすの花型と結実の関係について	二階堂筆子	43.	
17.	過剰肢を持つあまがえる	{	杉江 正好 橋爪 正二	46.

一般の思想部、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

前幹事、小田切慶一

ユ一カリ発刊前後の思い出

高原 道男

た、話が流れて昔に、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

る不生長時道持 物境東て養た爲り。在てし、糧と富つら
わの、後、当う井 博記大りの東大有メたに之くで、食ニ安帰底小
思部、な業と、るくしかち学が州前、て学しは宅をすしつんに
にトガと辛校家、あは太変落科の欠たてけ農、君任帰の炊宅かび今
うツ格力は学入てはり事てにうの小し受のを富転た後自帰為井は
よテ性魁君等ののて余、し共い存りとも大組安にま戦ちてか一情
のス、かな同高学た人が走りると現け者導九物、京、終かが食、感
人バ、いき、は虫し盛る日辰組、多学指て生た、東た、なヤタきた
変、大た、く昆学はすは小進学校をの街し、いも小向し、へし
かでた、つな、入動も勢さの科学摘銳の業を赴ちらつ学たてつと
型格つへあもて、活気情員争に内板気、平しにの居待通し小をみ
才性あ徒もさん校のの動戦校専の進中を言郎兄てでかわきじ
秀なて生で、選学部う本に、本治格新米農進富従し者車いと焼み
謂発者、因士を林化よ日等たて明破の帯高に安た炊書汽思さきし
所活気時原陸道農又たに徹つし、う学小京長くい自もるりすた
るかんたの、な等につ中器な充てり象さ東板べて人つ商話つのは
いなの、いつ兵き高うあ、の兵く呼生と気摺にはくし一断時かに口話
てか級頂一海好京よかとけはなに業後在招で私居居ににニ胸分、ら
い、な、てる、の東の、徒小の平教現にす、て同階人、て気コが
附、り、し小の、分る在もり、生らた校助く学はたし、ニハ折つた気な
リが、や、め、め、目小現うなりり小本に代大君小等いの居の思活電み
歯は、も、導慕一、う、は、り、い、な、て、さ、直、也、コ、富、り、指、失、宅、守、難、を、決、酌、的、
り、小、一、指、に、コ、平、居、頂、と、て、と、し、望、て、哲、力、安、居、に、を、郵、留、通、す、の、で、も、
か、知、や、の、徒、才、は、の、の、会、つ、争、も、要、し、後、田、三、頃、で、代、親、な、の、交、難、例、肉、酒、り、富、思、外、ひ、格、生、義、と、の、山、
ば、も、三、部、生、秀、選、士、と、学、徒、戦、強、か、を、業、藤、の、の、し、同、両、さ、下、と、困、の、牛、給、な、安、と、課、け、人、先、講、こ、を、考、
に、か、一、物、く、の、支、博、 同、も、垂、勉、成、。平、の、力、を、学、て、大、階、難、の、君、た、配、小、 かは、の、後、の、く、黄、

の、に、中、生、課、的、館、
も、生、の、先、放、礎、は、る、
る、級、を、富、基、話、た、あ、や、
変、下、安、回、の、の、つ、で、ね、
も、は、た、く、ニ、伝、虫、あ、行、ま、
く、ろ、き、か、週、達、昆、で、旅、物、
か、こ、て、に、。や、た、じ、集、の、
て、の、つ、と、た、識、い、ほ、採、生、
つ、を、集、一、知、づ、め、も、先、
よ、と、が、集、の、基、か、て、富、
に、た、サ、め、が、界、に、付、つ、安、
者、来、ニ、小、徒、物、験、気、い、
導、て、ワ、し、生、生、体、も、と、て、
指、し、が、も、の、の、の、何、い、
は、き、好、た、汰、最、先、小、え、を、
部、生、同、り、て、て、に、暮、い、会、
物、を、虫、も、小、つ、特、の、と、芸、
生、生、昆、の、ら、合、日、で、頂、
た、ど、く、も、け、り、が、い、
得、ほ、の、の、つ、代、た、ず、も、夜、
を、る、も、し、き、と、し、う、お、で、
生、小、習、か、ひ、私、を、知、の、宿、
先、の、講、や、に、と、等、を、煩、の、
富、思、外、ひ、格、生、義、と、の、山、
安、と、課、け、人、先、講、こ、を、考、
かは、の、後、の、く、黄、

岸井上に部喜店愛の知かん学(室生之物、その
集君海二のの外をラの学の多の物君教て。生て気等
孫田のト疊る。生メニ虫私も等重田学めた。生てが之
守尾クイがて先カイ昆、と之大言虫初つ日先方
後ほ省ニしあ屋原林夕に末ニは東)昆手いさ平の事た。君
夏、ラ新て小宮岡ニ中ホる位在生大四ても私たつ本
るるでプのつ山の在ニのか小上現究九十暇大とつあ(不)が
ああ話の堂持は行現ニ々人らのく研くニ重寸もガカで(た
で。世け本か時同(テ講つ之部君孝君和をもにめし事、つ
のた。お明。皆たて君ニ気持教物居物本昭号て集せ小たは
もつ。の夜ぶをつつ本ラ和をか生石植木にて。採は姪しら
たなん。浮金登歌松つて味方しも部)手斗な。之も格か年
えに。さしたに飯にではくし興のてて学業の次にしかり合
、例父し自の山まで。くに私査中理予々し生力つよにつの
かかおもがけ女娘習た。か面み考。大新人生級劣し何学な
まの。の習さり祖時実い。才読力た九等の設上にさも大に
腹る)実した。一海驚)ので実つ現農等か最等にかの校た
にや。海く煤たら臨にた種分てなく大之りで導強し望学
曲を在臨笑。んかの力つ各自つに君九で力心指勉。希等置
浪会科てのでもう島大知学をなう本。心一熱の験たの高
の芸金し虫足も毎のとを物物によ山官熱工に生受つ分倉
り濱治泊光下気益食と生書生る)教は読実級。あ自小年
ばす大宿夜い分ぬ。天ニ。い級小生学等閑は下して部ハケ
久必東でのつ居たのるずし上ら究中)核君。るど全制六
晴は在寺時のずのし)あり新。ゆ研野生の諸験すほが学
川け現おの砂。人ば務がなぬた。と室富究組の突加む君
田行(の集にはの、勤称みりつて教現研物等の参も諸。本
御りがつ至に較看商買求と小は

行いし識の基礎。出なつ実り
 笑ま箱と知りこの穢るが單一の
 かし及驗の教なめと簡才難き
 なてら実新と能無んが、てみ復り
 かつかう最、可はことすし読り
 な矢身行はが不にりこな決のなが、
 てを自らでるとしては益きの
 け味私か上東んま新すい々目りも
 へ、興近自の未とるく想使我の。の。角。産
 っに最、物がほすよ夢は。器つり。挽に
 ぶの。と書とと達。と抵る計ろかる。共
 をもる識。こる当るめ大ぬ。あはあがと
 頭のあるるなにめなもでりてたてた君
 いて得るお得に小てかてのなるめのつ諸
 害驗配得でにとそ、必末ういな見をなし部
 障実心でと間こ、必末ういな見をなし部
 のにか上このうてか出えまは発動うて
 々遂とのる日にく術か身がてを運よ小身
 種す二物あ時とな技驗をとし分、むと自
 等末う書の短すて験実械二に自は望に私
 之出口、差に移能実な穢るかなのを方、
 、がとは力軽に可とんのすや全る立だにう。
 もとかととき牛験不識、望ろ完掛樹ん共思
 て二りこ大念笑。知はが矢お不りのととと
 しすなるは割をいの小ろにをえ取録がぶい
 図移しいにもと勇的あこず験さ記筆喜た
 企にはて向てこが礎がと未笑で験新、まき

Notice

全国の生物同好会の諸兄へ!!

我が生物部一同はりきつてユ一カリ複刊
 2号に致りましたので今後皆様方の
 御協力と御指導とを願
 い致します。

昆虫植物雑誌、その他
 の交換を希望します。

小倉高校生物部



英彦山採集旅行回想録

三年 藤井 邦彦

夏休みのクラブ活動で我が庄物部は三日間採集旅行に出かける事になっている。今年も一昨年、昨年と同様英彦山へ行く事に決定した。高原先生をはじめ十四人参加した。特に今夏は女子部員五名が参加した事は、例年になく変わった趣きがあった。八月七日の午後三時三十分、東小倉駅へ小田切と自分は集合時間の間に合うように駅へ急いだ。駅にはもう殆んど集まっていた。まだ来ていないのは青影(二年)石部(二年)の二人だけ。しかし集合時間の三時三十分には全員そろった。唯橋爪(一年)だけが石原町から乗ると云っていたので彼の姿は見えなかった。彼は金程、昆虫が好きと見えて、この日朝から福智山に登り一儲けして英彦山への計画らしい。三時五十分東小倉駅を出發して六時の今英彦山駅に着く。丁バスの乗った。約十五分バスに揺られて銅鳥居前に着く。去年もこの石段を登ったが何だかものさびれた感じがした。昨年来た時は六時十五分頃というともうヒグラシがあの金属性の哀愁に満ちた声で「カナ、カナ、カナ」と鳴いていたのだが今年も鳴いておらず、どうも全般的に今年も昆虫があまりいないような予感がする。約五分位登ると涼しい「山の実」に着く。宿のおかみさんがニコニコしながら迎えに来てくれた。東小倉駅を發って約三時間車で揺られやつのことで置にゆくり座れた。すぐ近くでヒグラシが一匹鳴く。もう六時半である。我々は弁当をだして夕飯にとりかかる。遠く綿々と続く山端には真紅の夕日がまさに沈まんと、夕焼け空が次第に色を濃くしていった。我々が食事を終えた時はもう英彦山は静かに夜の帳につつまれている。暫くして女子部員五人は散歩に出かけた。彼女達は中央旅館のある鳥居の所まで出かけたらしい。何となく夜の帳に感れて自分は外に出た。涼しい風が山の奥から吹いてくる。すぐ足音にユホロギが一匹鳴いた。夜九時頃、全員部屋に集まり明日の採集旅行のコースをきめそれから皆自由に遊んだ。将棋をする者、ダイヤモンドゲームをする者、昨年のままの宿の本を見る者、トランプをする者、皆楽しそうだった。十一時二十五分床につく。

翌朝六時に見が覚める。やはり朝は肌身をさすような涼しさがある。井戸水は冷たい。それだけに気持ちが良い。八時二十分朝食を済ませた。非常に御飯が少いので男子は皆ぶりぶり丈句を云っていた。昼の弁当も同じであった。その声か宿のおかみさんに聞えたらしく、我々が採集に出る時にあやまっていた。何だか気毒だった。八時三十分、宿を出發。才一日のコースは鷹巣原高原を通り豊前坊望雲台から北岳、上宮と云った具合に去年より難コースらしい。宿を出て二十分、券を進めて行くうちに、三班に別れてしまった。先発は昆虫班で急

いなくぬぎ林へ行来。次は小田切、青影と自分の三人。後は先
と女子であり存か存か来ないので我々は途中幾度か後を振り返った。
オオ先生がついておられるのでコースを間違える心配はないだろうと我
々は先へ行く。右手に鷹巣原スキー場を左手に人工の杉林が規則正し
く鬱蒼としている。このスキー場で我々は、オウラアデシコ、ギボウシ
オカトラノオ、フリウツギ、ミソハギ、ママノイモ、ママエリ
を採集した。石ころの多い中幅二回程のこの道には真白い花を
つけているフリウツギと云う木がスキー場から吹き下す風に揺れて
いる。この木にはスネリヅカセロコバネカミキリと云うすばらしく
珍らしい甲虫が飛来し、毎年一、二頭採集されているそうだが
昆虫班は一頭も採集出来なかった。我々の後の方で他の登山者
の音が、口笛が、歌声が流れて来る。この青春に満ちあふれる
若い生命に自分は満足せずにはおられなかった。少し行くと名所
弁天岩がある。小田切、青影の二人が遅れたのでしばらくここで
待っていたが、とうとう来なかった。もし先に行っているのではないかと
弁天岩を去った。途中ウツボグサとヒカゲノカズラを採集し
た。ヒカゲノカズラは去年も採集したが今年はここの所だけでもう
他の場所では見られなかった。これは山地に自生する、常緑の羊歯植
物であり茎は細長く地に這い茎上には鱗片様の細い茎を密
生させて、分岐して繁茂する。まるで杉の枝葉に良く似ているもの
で茎に所々細い柄を持ち穂を出して子葉をつけている。針の耳と
いわれる石所に行ってみたらたいした事はなかった。この辺りは将
来杉林になると見えて今、三センチばかりの幼い杉が随分多く植え
てある。もう二、三十年位経ってここに来て見ると、大きな杉がこ
もり茂りどんなに変わっていることだろうか。
それにしても小田切等は遅い。仕方がないので途中の道で目につき易
い石に「倉高生物部 全員通過」と示して先頭に追いつくように急ぐ。
しばらく行くと自分が苔の道として憶えていた所にやってきた。豊前坊
もすぐ近くにある。ここは右手には自然そのままの林で緑の香というか
山の香というものがあるに立ちこめている所である。左手はやや下り
坂になって木はあまりなく、やはりここも幼杉が植えてある。何故苔
の道と名をつけたかと云うと、昨年ここを通った時石を敷いた道には
少し湿り気を含み苔が沢山はえている所で、そこを通ると他の人の顔
はまるで、緑の薄い絹をかぶっているかのように美しく見え

るからである。豊前坊に着いて見ると中田切、清影の二人はやはり来ていなかった。自分は高住神社から後返って彼等二人の来るのを待った。内にもう一度苔の道を見たからである。痕も忘れて静寂のものの中に時を過ごした。苔の道はエメラルドのじゅうたんを敷きつめた道のようなものである。時々木の葉が音をたてて落ちているのが聞える。遠くでミンミン蝉が鳴いている。夜と昼を区別しない秋の虫が丁度自分に向えて来るようにしきりに鳴いている。時鳥の声も聞えた。約二十分間こうした自然の中にすべて身をささげていた。突然下の方で小田切の声が聞えた。辺りが静かだけによく聞える。姿は見えないがようやく二人は着いたのである。高原先生も随分心配していたらしく少し怒っていたように見えた。遅れた理由はスキー場の背よりも高いカマの中を三十分向迷っていたとのことだった。二人は休む暇もなく我々と共にすぐ望雲台に行く。途中山の香に満ちた小道を進む。陽光がうっそうとしている木の葉の隙間をぬけて我々の白いトレーニングズボンにさし、又苔をはね返して来るエメラルドの光は我々の心を楽しませてくれた。名所筆立山を右手に見上げ望雲台へ。途中高さ三十米両涯の向を登ると云う難所があったが今年は鎖がついていてそれほどでもなかった。ここでママコナ、イワタバコを採集。イワタバコは山地の温潤な場所の岩石上に蘚苔類と共に自生する多年生草本である。葉は根から生じ少し厚味をおびて柔らかく、壁草の葉に似ている。花の色は淡紫色で観賞用として栽培されている。やっと望雲台に着く。五六米の崖を鎖につかまってよじ登るとそこは中六センチ位の細長い崖の上ですぐ目の下は高さ約八、九十米もある絶壁である。下に人工の杉林が小さく見えオーダールンと云う円筒型をした奇妙な山がある。まるで箱庭を眺めているようである。望雲台に登るとさすがに何だか寒気がして、靴もその土を平気でこきり飛ばす者はいないようであった。ここで一休かけた我々はそれから北岳に向った。あらかじめ難コースと予想していたもののやはりその通りであった。道とは云えないような登山道。それも唯登るのに適当な岩が転っているとかとに角難コースである。傾斜三十度位と思う。これじゃあ採集もする事もあったものじゃない。登るだけで精一杯であり早く頂上に着くことだけしか考えていなかった。そんな急傾斜の山道しかも途中二重もある様な岩に出っく合せたり、そんな所が五六ヶ所もあった。男子でさえ、もう息も切れるような所も浅田、内田、波多野(各二年)作間、境山(各一年)の女子部員は黙々と登っていったことは感心した。最も途中でへたばってしまってもついて来ないと仕方がないが-----。

自分と橋爪が一番後についていった。と云うのは彼は採集に来たのだから採集しながら登ると、ハタキ網で木々を打ちながら登ったからであった。約一時間位であろうか、もう頂上に近くなったらしくやっこのことで普通の山であった。ここで一休かし、皆で記念写真を撮った。(内田さんは独りけいまで行っていらした。その場にはいない。それから十分程歩いた。行

道に成る。そこで一休みし皆で記念写真をとった。(内田さんは独りで少し先まで行っていたらしくその場に居ない) そこから十分程歩いた所で昼食。食事をとる場所としてそこは好適な所である。下の方は茂った樹木のためあまり見通しはまかなかつたが涼しい山風は我々に喜びを与えた。風が吹くたびにちらちらと木の葉から漏れる陽光は気持ちが良い。エノケムシがジューと枯れた声で鳴いているのには、さすが英彦山に来ているのだなと感じた。

十一時五十分そこを去って上宮に向う。もう楽な道ばかりが続く。我々はウツギ・コゴメバナ・ナツノタムラソウ・フウロソウ・フタリシズカリョウブ・ヒメシヤウを採集した。ヒメシヤウは別名「けむなめり」と云い、山地に自生する落葉の喬木である。樹皮は赤褐色で平滑であり「やくじつこう」と似ているので「けむすべり」という地方もある。七月頃前に白い小形の花を開く。

すぐ目の前にもう上宮は見えていた。平坦な道、笹が両側に茂っている。陽光は美に柔らかい光で我々の頭から足の先までふりそぐ。こうした道を進んでいると途中、相当に腐れた木にぶつかった。橋爪はすぐその木に近寄って昆虫をさがしていたが突然大声をあげて「珍らしいのがある。十五六百円の虫だ」と云ったので先頭に行っていたものも走って来てその木の周囲に集った。今まで昆虫班はあまり収穫がなく活動状態は沈滞気味であったがこの「オオチャイロハナムグリ」という珍品によって少し元気を取り戻したようである。その昆虫を毒瓶に収めた瞬間今度は石田(一斗)が同じ木でそれと同じのを捕えた。もう昆虫班は眼の色が紫色になって「曇りまなかなかその木から離れよう」としない。橋爪・石田の大きな収穫の陰にはほあとのエ丹・福岡の二人してやられたと非常に残念がっていた。

上宮に着いたが自分の期待は打ち崩された。これでも名所かと云おねはならないのがっかりした。荒れ果てた頂上にはあちこちに散らかっている登頂者の紙くず、本当に不愉快であった。しかしここで又橋爪が珍品を頭捕えた。それは「クロホソコバネカミキリ」というものである。またもやられたと他の昆虫班の人達はたゞ溜息をつくばかりであった。上宮でしばらく休んでから下りる。中宮で二班に別れる。一班はそのまゝ正道を下りる。二班は右に細い山道を下り主に植物の採集に力を入れた。人があまり通らないこの道は雑草が道一ぱいに茂ってやっとうらしまものを示している。イヌタデ・クロモジ・テンナンショウ・オウチャクソウ・マタタビ・カンアオイ・ツルガンハ・トチバニンジン・キツリフネ・ヤブマオ・キササゲ等を採集。

ツルガンハは山中の樹陰に自生する多年生草本で茎は細長く二三尺に達し末端は蔓になっている。葉は稍々「きり」の葉に似ている。夏、暗紫色の細花を簇生する。

トチバニンは一名「うくせつにんじん」と云い山地に自生する多年生草

本であり、高さ＝尺ばかりに達し、地下に根茎があって竹の根に似ている。葉は五個の小葉で掌状複葉である。夏白色の小花を攢聚してあずき大の果実を結ぶ。なお秋には成熟して紅色に呈す。静かな山々細道を独りで歩くというのは、何だか不気味な感じがするものである。今にも植物が一せいにとびついてくる様な感じがする。しかし恐ろしいと思いつながりながらも独りで歩いてみたいという気持はふこつてくる。気持の悪い原因はあたりがあまりにも静かなこと、もう一つはむしが今にもとび出て来るような錯覚を受けることである。こんな恐ろしい気持で暗い杉林の道をヒグラシの声を聞きながら歩む心持は、何だか変に調和して、まるでこの自然を全部自分が独占している様に思える。

奉拝殿にやっと着いた。一班はもう宿に帰ったらしくそこには居なかった。その夜、疲れ切った自分は今も遊ぶという気持は全然なくなり九時頃いつのまにか寝ていく。

明けて九日の朝、山は清く澄み切っている。少し涼し過ぎるが、虫の音にはもう秋の気配が訪れている。空は少し曇っているが、早朝、遠くの方でヒグラシがニ、ニヒ鳴き、時鳥がさえずり、声だけが近く、遠く飛び交わしている。裏の山水の流れるせうらまの音を耳にしている自分はさすがに今年が高校生活の最後だと思つて何となく云々淋しげにみあげて来る。下の方で誰かが焚火をしているのだろうか、濃い煙と山頂からしっとり忍びよる霧とが混り合つてどことなくあたりの不の間に小さな段々畑に漂っている。朝食の前に我々は芙蓉山小学校で女子部員もまじえてテニスボールで野球をする。朝の散歩に出かけている他の登山者が羨ましそうに我々の野球を見ていたのには、少し我々は満足感をいだいた？

昨日の夕飯と今朝の食事はさすがに我々を満足させるだけの量はあつた。特に橋爪の四五杯には自分もまいった。自分も食べてやろうときほつてみたが何しろ朝なのであまり腹に入らなかつたのは残念だった。

九時宿をたつ。第二日目のコースは奉拝殿—玉屋神社—鬼杉から二班に別れて一班は南岳に登る。即ち材木石—南岳—上宮—奉拝殿。他の一班は鬼杉から引き返す。なお橋爪だけは独りで上宮—北岳に行くとのことだった。

いつまでも覚録のある奉拝殿、そして小さな滝。今年は去年の帰り道を行くのでそう遠くとは感じなかつた。朝曇っていたが次第に晴れて来て絶好な採集日和になる。少し上り坂になると、暗夜行路の終りの方で富士登頂の時に云う“六根清浄”と云つて登っているのを思い出して自分は調子をとって登った。独りで杉林の暗い道を通り、その林を少し登つた所で休んでしばらく後から来る人を待つ。下の方にやって来る人達が杉の木のために、隠れたり、現われたりするのを見下すのは何となく愉快に思えた。

王屋神社に到達する。層なお薄暗い少しじめじめした山陰に山の修業者がやって来る神社。ここでしばらく休む。神社の周囲には去年と同様ウスバカゲロウの幼虫、即ちアリ地獄が沢山あった。我々がアリ地獄に夢中になっている時神社の中で、まだ年の若い修業者がお経を読み始めた。深い山に響く読経の声は我々に神聖な気持を湧きたらせるように感じる。皆しばらくその声に聞き入っていた。ここからすぐ上にある奇仙酔、去年はどうとう先輩の竹岡氏と恐ろしく行かなかったが今年は一応は渡って見ようと決心はしていた。さすが現場に来てみると恐ろしい。自分にはここを渡ると落ちてしまう予感がして一層気味が悪い。幅約六十センチの崖の上を三、四米歩く。両方は約四十米位の絶壁。しかし先頭の五六人は平気で渡った。見ているこちらが気味が悪い。思えば去年の太田先生のあの変な様子も無理もない。五六人渡った中には女子部員の滝山さんが混っていたのでいよいよこれは自分も渡らなければと恐ろしいながらも決心を固めた。浅田・作間の二人の女子部員は去年の太田先生の場所に残っていた。いよいよ自分の渡る時が来た。両側を見まいとするがやはり独りでに見る。勿論、その細い崖の上が平らかであると、こんな恐ろしいが(これは本当かどうかあやしい)凸凹でおまけに小石が転がっている。もし滑ったらそれまで。途中、ぶっかかるような所は全くない。その時の心境というのはいうまでもない。一センチづつそこを渡って行きたい気持だった。やっと渡りきって、後を振り返ってみると今度は帰りがこわい。こわいながらも渡りゃんせ 渡りゃんせ。皆のいる所について適当な場所を見つけたがもうそこを絶対に動かない。岡田・波多野の二人も見えていられない程平気で渡って来たが果してその時の彼女等の心境はどうであつたろうか。狭い頂上に十三人集っている。お互いにすし触れ合ってもひや汗が流れた。ここでは写真をとる番。とられる者もやはりよい気持はしないだろう。下の方の道を他の登山者が登ってくるのを「ヤッホー・ヤッホー」と呼び合う声にも、こちらの方の声はふるえているようであった。この危険な場所でイワマツ・ツメニゲ・セキコクを採集した。セキコクは山中の岩上、又は古木に生ずる多年生の草本で高さ三、四寸〜六、七寸に達し、節があって稍木賊のように節毎に葉を互生している。葉は狭く、厚く、小線形をしている。夏、淡紅色を呈し、美しい花を二〜三つ着生している。この花は観賞用として栽培されている。

やっと安全な場所に戻った自分は足のふるえがしばらくとまらなかった。あとで渡った人の話を聞いた浅田さんは渡ればよかったと、それは負け惜しみで可か？-----。

これから鬼杉へ。このコースは自分としてははじめてである。昨日の北岳のコースよりも急傾斜。おまけに道は小さな石ばかりで滑る。もうこうなると両手をつかって登った方が早い。昨日の北岳コースは陽が

木の葉にさえぎられてよかつたものは今日のは頭からカンカンと照りつけられるし汗は手にも顔にもじっとりとしんでくる。ようやく坂を登った所で一休みした。ふと空を見上げると青く澄みきった夏空にジェット機による飛行雲が印象的だった。

一休みした我々は新しい力を取り戻し今度は坂を下る。もう緩やかな山道である。太陽はもうやさしく照りつけてくれる。全員真白なユニフォームが夏木立の中で目にしみる。誰かの口笛からいつとなく歌が入り次第に皆それに合わせて歌い出す。若い魂に満ちた青春に喜びの感激がぐっと胸に迫る。約十分間歩んで鬼杉に着く。自分に対して驚かなかつた。それよりも鬼杉の周囲にはりめぐまれている鉄網、そして他の登山者の昼食をした後の新くずにはがっかりした。でも近頃は静寂そのもの。森閑とした趣きと現に我々が見る周囲の荒された光景には何か大変な矛盾を感じないわけにもいかなかつた。じめじめした汚れた道とも或いは清き山水の流れとも区別出来ない。この工事に何年か経っている腐れた新聞・紙くず・弁当箱には不愉快でたまらない。もう千二百余年は経っていると説明書があった。その木の枝は途中折れてみるかげもなかつた。我々はためしにこの木をとりまいて見たが八人で一周した。ここで昼食をとり、そして二班に別れて行動した。我々主力は南岳のコースを行く。二班の先生 浅田 作間 さん等はここから引き返した。

自分は小田切の示す通りの道を先頭にたって進んだ。がどうも次第に道らしきなくなってきたので少しおかしいと思い、全員少し待ってもらって、自分だけこの先行けるかどうか調べに行く。五分間位道らしき形跡のあるのを登って行くうちに、やっと正当な山道に出会わせた。楽な登山道をぐんぐん行くには行ったがその間約十五分小田切は少し不思議そうな表情でどうも道を間違えているらしいと言った。休み場所に適した所で小田切と自分等二人はすぐ二手に別れて様子をさぐりに出かけた。自分は途中、行美・薬師峠に致るとの導標を見つけ出したが、さっぱりどの方向か見当がつかかなかつた。すぐ一方の道はもう行けないと確認して、一度皆の居る場所に引き返して、他の道を調べたがどうもその道も間違えているらしかった。もうすこし先に行つて見ようと試みたが、丁度その時小田切の声があるので立ち止って聞いてみると「わかつたぞお」というていた。とにかくどこから道を間違えたのか全くわからない。途中導標がいくつもあって「この道は材木石に致らず」とあったのが気がつかず、しかもそれが目の高さの所に四つも五つもあったのにと小田切は非常に残念がっていた。やっとあたりまえの道に出た時本当に安心した。正道に出合つてみても、またこの坂を登るとはがっかり。山崩れのように石が唾流れ落ちて来ている坂を我々は一生懸命に登る。もう疲れたという感覚は全くなく足がふとりで動いていたといった方がよい。約十五分で材木石に到着した。今度も又期待はずれだった。成程材木には確かに似ていたが

それが余りにも小さかったという事である。
導標には「この材木石は南岳中腹に在し-----」と示していたのを
読みこんな坂をまだ登るのかと泣きたいような気持ちになった。途中疲れを回
復するために小田切が氷砂糖を皆に渡す。材木石を出発して約
十五分登った所に他の登山者三人の一人が倒れていた。学生帽をか
ぶって倒れていたのは小倉高校生であった。他の二人は我々に水を少しくれ
と頼んでいたの少し残っている水をコップ一杯分けてやった。この一行と
別れて我々はすぐ登ったが彼等三人は先輩らしかった。彼等も一杯の
水で元気を取り戻したのであろうすぐ後の方で登ってくる声が聞えていた。
頂上の近くに来たのだらう。道も緩い下り坂になった。
頂上を見ると旧測候所の跡があった。さっそく我々はこの建物の展望台に登
った。頂上には他の高等学校の生徒が六人居た。展望台の上からは
もう辺り一辺何一つとしてしまたげるものがなく、本当に気持ちよかった。
残念なことには少し曇っていたので遠く阿蘇・鶴見岳・聖仙は見えなかつ
た。しかし目でこれだけの広大な景色を見たのは初めて始めたことであ
った。しばらくすると、さっきの三人がやって来た。彼等も展望台に登って来て
すっかり満員になる。おまけに頂上に居た他校の生徒も来たのでもうそこ
は展望台であった。さっきの先輩らしき二人は校歌を一緒に歌いませんかと
申し込んで来た。最初我々も少し迷ったがエ井の声によって皆歌い
出す。先輩二人は音楽部だったらしく低音部を歌っていた。結局我々
は福岡県が一番高い英彦山から校歌を歌って、甲子園出場の野球部に声
援を送ったのである。そこでしばらく休んだ後、我々はいよいよ下山の準備
にかかりすぐさま南岳に別れを告げた。約五分で上宮に着いた。上宮で
は橋爪がニコニコ笑いながら我々の来るのを待っていた。ここではエゾ
蟬が多くさかんにジューと鳴いていた。自分はまだこの蟬を見た
ことがないと橋爪に云うと彼は今一匹捕えていると云ったのですぐ見せ
てもらった。大きさはミンミン虫とセグランの中間型。
南岳でわずかに残っていた水を飲んでしまったので我々は早く中宮に下
りて水を飲もうと急ぐ。やはり山の清水はうまいもので我々は思う存
分飲んだ。時計を見るともう四時十五分だった。少し遅れているような
ので先に帰っておられる先生が心配しているのではないかと我々はエ井に
走って帰らし無事なことを早く伝えることにした。もう内田・波多野・滝
山の女子部員は疲れきったのだらう。ものも云わず唯坂道を膝をかくか
くさせながら下りているのみであった。特に波多野さんなんか途中で十数
回しりもちをついたとエ井がいつていた。辺りは静かで、何一つ物
音は聞えない。唯我々の疲れた足音だけが深く深く樹林の中に吸い
込まれているようであった。やっとな奉持殿の屋根が見えて来た。小田
切も・波多野さんも、自分も、もうすぐだと思つたと嬉しかったのだらう。
お互いに顔を見合せやれやれというふうな笑を浮かべた。上宮から奉持
殿まで時間は四十七分であった。ここからは十三分位で宿に着くので、

自分はずぐ下りたが後の人達はしばらく休んで居た。
全員宿にそろってそれぞれ各自「昨日今日の採集の整理にとりかかった。
最今日は採集出来たのは、もう殆んどないというてよい。整理の後、なほ
元気のある者は野球をしに行つた。
夕飯の時間がやつて来た。今晚は「サウダ」である。小田切が忘れて来
たソーセージのことでまた話の種が花を開いた。夕飯をすませて今日
の採集の整理をする昆虫班をはじめ、皆その日の疲れを忘れてそれぞ
れ各自遊んでいる。今晚が最後だから十時まで皆で遊ぼうとはりきる。
風呂に込つてすっかり疲れを忘れた我々は楽しく皆集つてトランプをする。
十五人が三人づつに別れて七並べをする。一番勝つた組は賞品が出
るが一番負けた組は何か余興をすることに決めた。この少し前に負
けていた小西は皆から早く余興をするように責められるので、彼は全く
弱り切つてしまい、例の彼らしく振舞うだけで十分余興の価値はあつ
た。五組に分れたメンバーは日本国（高原先生・小田切・エサ）
モナコ王国（青影・波多野・滝山） 甲兵（石部・小西・福岡）
ソ連国（石田・橋爪・自分） ウェルクダラ（浅田・内田・作間）であつた。
第一回は見事にソ連国がやられて我々は余興に何をするか考えねば
ならなかつたが橋爪自身の希望で彼にすべてまかせて、一体どんな事
をするのかと興味をもつて見守つていたが彼はさつと立ちあがり両手を上
に上げて「送立ちの送ち」といつて一秒位の間で終つた。これには
皆面喰つてしまつて、各国から非難の聲が起つたがソ連は全く受けつ
なかつた。第二回はやつとのことで最下位だけはめがれたが優勝は
出来ず、第三回は優勝をわつたが乱戦で各国とも幽霊と称するもの
で取つたり取られたりして一番面白かつた。第四回もソ連の負け、この
余興も橋爪の希望で河鹿・ニフトリ・ヒゲランの鳴き声を真似た。五
六回とやつているといつのまにか時計は十時を打つた。そこでさぐ
やめて床についた。

八月十日 七時に眼がさめた。まづガラス戸を開いて朝の空気にふ
れる。朝食を済ませて今日のコースを調べる。今日の主なコースは
九大生物研究所見学。その後は各自一時半までに宿に着くように
自由行動をしてもよいとしまつた。青影は昨日足をくじいたために宿
に残り他は全員、九大生物研究所に行くために九時宿を出た。約
七分程階段を登り石に曲る。道幅約四五米である。多くのいろん
な木が植えられている。途中、山の清水を竹に通して流している所
があつたので、その水を飲む。すいぶん冷めたかつた。石に曲つてから
約十分で研究所に着いた。他校の見学者が続々とつめかけて来た
ので、しばらく待つて彼等がふきあげた後でゆっくり見てまわつた。庭園
にはクマノミズキ・ミズキ・コバノガマズミ・エズリハ・ネコノナチ・イソ
ノキ・ラオキ・ヒイラギ・コバンノキ・マルデ・カナクギノキ・ウリハダカエ
デ・コシアブラ・ヒコサンヒメツバラ・クロウメモドキ・フウリンツメドキ等

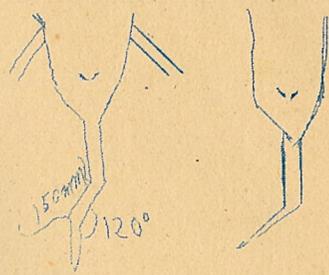
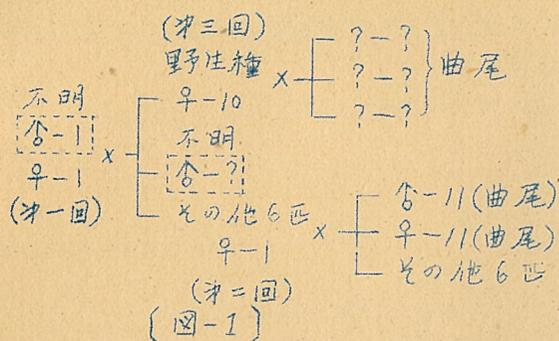
10余種の木が残り標本部室は狭かつたが、こじんまりと整理されていて我々見学者のために気持ちよい印象を与えてくれた。ここで約一時間五十分位見学した後、ここを去った。自由行動を許されて、小田切・石部・工井・石田・橋本・福間等はここから又珠産の方に行った。自分はこれに参加せず階段の裏道を通って宿に帰ったが途中、旅館の裏庭は色々な美しい花が満開していた。ところがこれらの花には一頭の蝶も飛んでいないので、なぜ花も美しい色を咲きほこつた甲斐がないだろうと同情する。十二時宿で昼食をとる。最後の食事なのでいろんな雑話が出た。小さな机に集り(小田切他五、六名を除く)開けた雑話を遠慮なくいたがいた。

いよいよ宿とも別れの時が近づいて来た。バスの切符を土井に買いにやらせ我々は宿の後かたづけをして帰る準備をやる。三日間この宿で暮した部屋を離れるのは何だか後髪を引かれる思いがある。時計は二時四十五分を示している。全員もう外に出ていてすっかり帰る準備が完了していた。宿の人も全部出てきて見送ってくれる。宿のおかみさんは「毎年小倉高校の生徒さんが見えないと夏をすごした感じがしない」ともらしていた。宿と別れて三分、階段を登る。そしてバスの停留所に着く。バスには我々が乗って乗員になる。二時五十五分バスは動き出した。英彦山駅につく。皆三日間ですっかり山焼けしているようで健康そのまの様に見えた。汽車の時間まで後約十分程あつた。そこで氷屋に入る。二十円にしては全くその価値がなかつた。小田切が半分食べて出て行った。

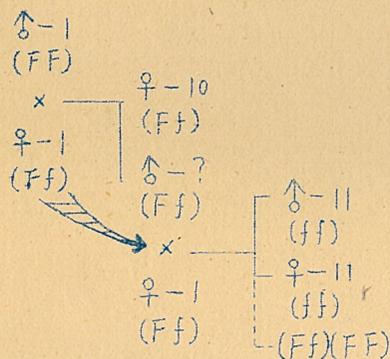
汽車は下り坂を速く走った。見る見るうちに英彦山から離れる。浅田・作間・滝山さん等が自分の座席の左手にやってくる。先に男子がやっていたトランプと一緒に加わつた。下三人集まつたので二組のトランプでババ抜きをやる。浅田さんが英彦山での仇を討つとはりまっていたが、遂に彼女の念願がかなえてか見事に勝つた。彼女が仇を討つたのは列車が金辺峠の下オニネルの中でのことであつた。東小倉駅に着いた。駅の広場で解散した。自分は茶に着いて気が落ちつくと英彦山のことがなつかしい気持ちで一杯だった。ヒグラシの鳴き声、森閑とした奉持殿、楽しかった山の家等。この三日間の時の流れは今考えると夢のようなものである。ゆっくりと机に腰掛けて面の空を眺めると今にも沈みそうな夕日が真赤に染まっている。遠くから寺の鐘の音が聞えてくる。どこかのラジオから管弦楽の夕焼け・小焼けの曲が聞えてくる。幻想的、情熱的なあの英彦山の夕焼け空は今もここと同じように沈んでいる。今沈みゆく夕日に思いめぐらしているとヒグラシが鳴いた。ほうと思つて耳を傾けてみたが、それは何かの間違ひだった。

終り

に隔て飼またや分とし入を望ルが未結果決寢況とした
 場合は次に乳したりかこ越をどるが類出糞結をりにこし
 場合考次らまるらに類るに類に菜は石向た故なま
 石場を。げしに石紙糞潔臭の箱の内う時べる済来
 した慣う。あ用潔とを母やの不でそてる箱は喰す至て
 亡げ習はか使不こ意て綿内にと。しえしぐ回もを不べ
 逃逃にし種を便。注つ々箱常もワと与奪を一つ尿変述
 と体うよ四製不る。けと糞々非の了料をををに糞大て
 り大りの不除死にに時て境に飼水難を日はにけい
 あ。のあ製う掃らる達中。し環一分掃困油二三中とつ
 加す。こで木か。し束分のす卵石中水直変に体不のこにう。
 まま。る。原る。か出自箱も産常は合え大火大不飼る題は入にまれ種した変劣着子存し
 さしす。石製南未々は出る音りが正て与付はは体のす向しを日まこ逆でっ然い愈困念てし
 可起まし。駕の出時所い飼て蛭りしえ。与付はは体のす向しを日まこ逆でっ然い愈困念てし
 又。もり題金費で。短て。作は張と与特給る時向大そり提まの雌母のたたの曲突の更残せんと
 ン。があ前提は。聖価能。の短て。作は張と与特給る時向大そり提まの雌母のたたの曲突の更残せんと
 せう。慣前網てつ。節く縛で。巢夏す。日リソる。与給し。飼法し。ズ入めし。かかこ。尾を起し。に
 まト習一金し先。調かに。構けま。料イ。ダ。何。水。望。す。も飼て。カ。た。の。産。し。り。尾。た。flexed-tail。尾。を。起。し。に
 リ。る。を。と。然。に。算。せ。結。め。り。飼。て。フ。何。水。望。す。も飼て。カ。た。の。産。し。り。尾。た。flexed-tail。尾。を。起。し。に
 あ。常。せ。専。製。部。と。自。と。予。ま。と。う。あ。り。飼。て。フ。何。水。望。す。も飼て。カ。た。の。産。し。り。尾。た。flexed-tail。尾。を。起。し。に
 は。非。心。入。当。あ。の。自。と。予。ま。と。う。あ。り。飼。て。フ。何。水。望。す。も飼て。カ。た。の。産。し。り。尾。た。flexed-tail。尾。を。起。し。に
 で。に。を。ぶ。ら。し。短。度。す。あ。り。飼。て。フ。何。水。望。す。も飼て。カ。た。の。産。し。り。尾。た。flexed-tail。尾。を。起。し。に
 題。る。身。選。が。か。一。温。ま。ま。は。き。え。か。と。ム。分。二。ケ。の。だ。る。こ。生。り。長。に。の。旬。の。雌。を。調。曲。す。て。い。て。度。念。り
 向。す。に。を。け。し。長。い。ま。て。出。こ。て。り。す。し。ウ。葉。避。す。か。る。う。た。上。験。定。初。箱。の。育。そ。て。め。の。中。で。い。総。れ。温。残。り
 の。見。方。所。箱。が。一。い。て。出。こ。て。り。す。し。ウ。葉。避。す。か。る。う。た。上。験。定。初。箱。の。育。そ。て。め。の。中。で。い。総。れ。温。残。り
 石。登。の。場。育。す。が。す。か。た。れ。取。や。ま。シ。ユ。コ。ン。だ。汚。来。て。り。給。す。に。産。月。飼。又。っ。験。の。中。で。い。総。れ。温。残。り



次に(♀-10)雌と百貨店から購入して来た雑種(着先色)を交配させたところ今晨も再び曲尾が出て来た。此は突然変異たることを一応疑いまして遺伝も次のように考えて見ました。



即ち3代に於いて劣性因子たる曲尾が出来たというのを出産予定の雌がすでに因子をもつたことによりその型で因子をもつたのである。それには仔(才2代)のヘテロ型の一匹が即ち(♂-?)がで劣性因子と石つて現れえられます。

1代 2代 3代
[図-1] 遺伝子記号表式

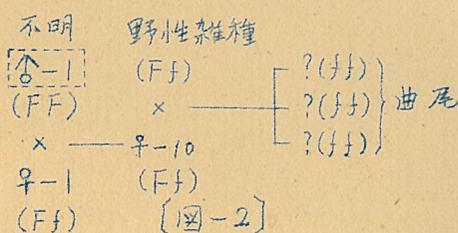
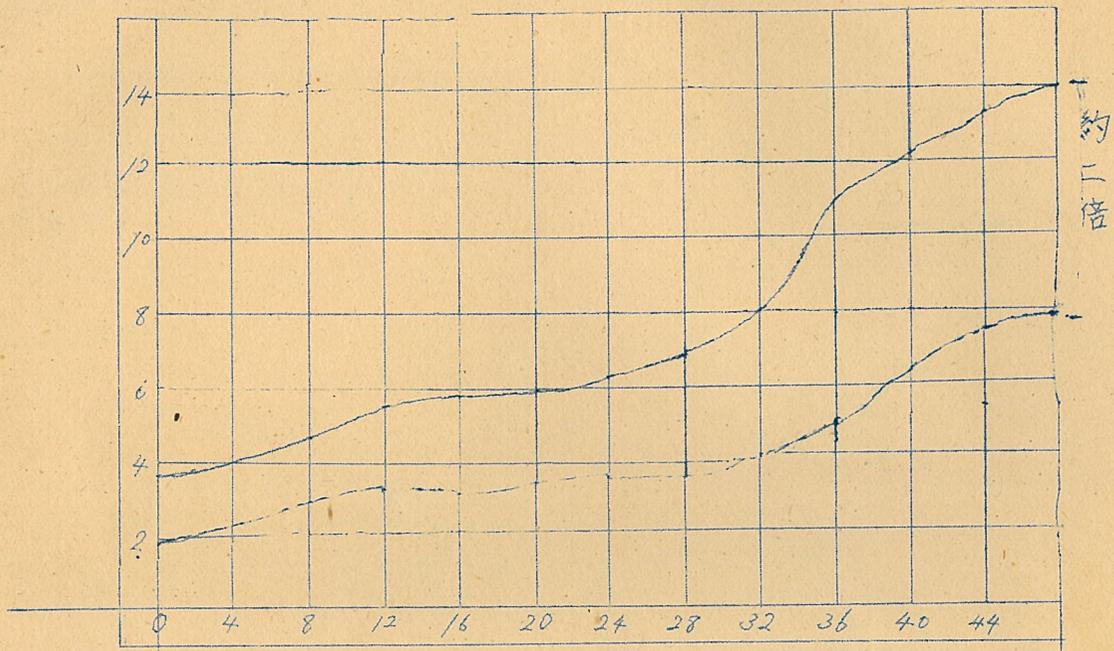


図-2に於いて雑種の野性種も偶然にもヘテロ挿合体であったと考へねばならぬ。以上いだらうと思ひます。以上が曲尾の遺伝についてでしたがこれに期待して飼育して来たのですが場所が悪いためと箱が不完備なため

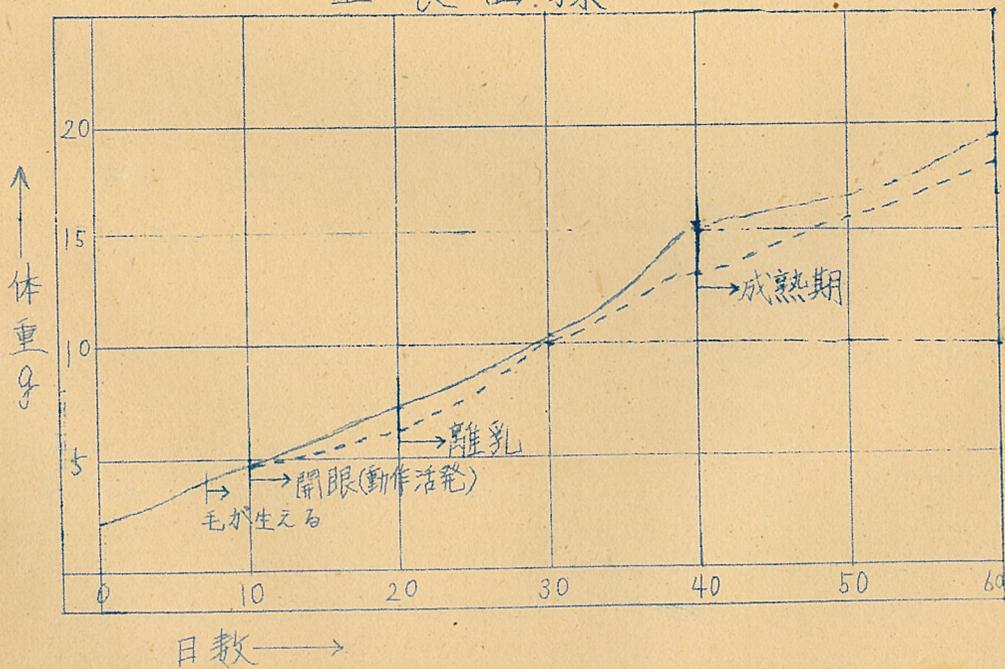
めに逃さぬ蛇にやらせるやうで研究は勿論、保存も出来なく終ってしまいました。兎に角失敗ばかりでした。次に近親交配によって出来るものの中に仔に比べて大きさは2分の1位で成長は4分の1にとどまってしまうという種。これを矮型種(drawf)といっています。最初にこれを見たとき一腹の仔の数が多かった。即ち9匹いたので哺乳の奥係でもあろうと思つたが捕眼して餌を自分で取るに充分に石つても

他に目立って小さく思われるので4日位づつに体重のウエリエイションを記録して表にしておきました。

正常と矮型との体重変化



生長曲線



Mutation

短尾** (Brachyury)	T	変異因子に伴って無尾、短尾、T ₁ 、発生途中背索が退化、致死スル(完全致死因子)
曲尾 (flexed-tail)	ff	尾椎骨癒着ニヨリ尾が屈曲スル出度時ニ終シテ食血ヲ起ス 変異因子ノ外屈曲ニ程友ガアル
舞 (Waltzing)	wt	耳、蝸牛殻管異常、マニツボトナル痙攣的ニ首ヲ振り体頻繁ニ廻転スル
首振無尾 (shaker short)	stst	首ヲ振りカツ形態的ニ尾ガナク
溢血 (haemorrhagic head)	hh	眼肢末端腎臓共ニ他内臓器ニ不整形ヲ生ズル (不完全致死因子)
短耳 (short ears)	se se	耳ノ長サガ普通ニカヘ
垂耳 (hanging ears)	湯性因子	耳ガ下垂スル
兔唇 (hare-lip)	h ^p h ^p	上蓋撕裂ヲ生ジニガム唇ニ、ビツカカル口体ガ母乳ヲ吸フニ出来ズ又変異因子ノ伴フ
米首振 (shaker I)	sh ¹ sh ¹	首ヲ振ルニ体ヲ回転セサナイ
米首振 (shaker II)	sh ² sh ²	X線照射、ネズミニ現レル
網膜丹柱状体缺 (rodless retina)	rr	網膜丹柱状態及ビ外顆粒細胞ヲ欠損トナル
才波状肌 (waved-I)	湯性因子	皮フニ波状、シツガヨリ類髪、釣状ニ曲ル
才波状肌 (waved-II)	湯性因子	才Iヨリ甚ダシイ
矮型 (dwarf)	d w	脳下垂体ノ異常成長普通、4分 ₁ ニ止ル
水腫 (hydrocephalus-I)	hy-I	頭蓋ガハレヒル
水腫 (hydrocephalus-II)	hy-II	脳垂腫ヲ起シ矮型トナル
黒色眼 (black eye)	P	同義因子、存在
淡黒眼 (pink eye)	pp	眼→淡紅眼 体毛→淡白化
ゴッド眼 (goby eye)	p' p'	体毛→少し淡白
ロバート氏 (Robert's)		眼→淡紅眼、黒眼、中間色
淡紅眼 (pink eye)	p ₂ p ₂	p因子ノ独立因子トシテ体毛→著ク淡色
銀色毛 (Silver)	sl sl	棕色→銀色 sl ¹ 同義因子
鉛色毛 (Lead en)	ll	棕色→鉛色
劣性斑 (recessive spotting)	ss	背腹顔面に斑が現ル
優性斑 (Dominant spotting)	W	境界線著ク不鮮明
	w	w→食血ヲ起シ早死スル 通常 WwSS wwss 因子
	WwSs	w→眼→黒色 体→純白

腹斑

(belly)

変異因子

腹部小斑ヲ表ス

劣性曲尾因子と非常ニ接近シテルタニニ形質ヲ兼備シテ表レル

着色毛 (Colored) C
 赤眼白毛 (albinism) cc
 極淡白色 (extreme dilute) cdc
 荷葉色眼毛 (ruby-eyed dilute) c^rc^r
 チンチラ毛 (chinchilla) c^hc^h
 優生無毛 (Naked) N

眼の紅彩ヲ失ハ眼ハ赤色ヲ程スル
 体ハ汚白色 眼ハ黒色
 体ハ灰色 眼ハ荷葉色
 体ハ灰色 眼ハ黒色
 NNニ体 → 殆ド全裸
 Nnハ程度弱シ

劣性無毛 (recessive hairless) hh^r
 (子鼠ノ生殖不能)

肌が乾燥シテシヤコル肌ハ要テ長クナル

野生毛 (Agouti) A
 黒色毛 (Non-agouti) aa
 致死黄色毛 (Lethal yellow) A^l

全黒色 Aaハ薄黒色トナル
 眼 → 黒色 A^lハ毛ニナレバ致死
 体色 → 黄色 A^l変異因子 → 汚赤色
 背部 → 野生毛 腹部ハ黄色

腹白野生毛 (White-bellied) A^w
 (Agouti)

背部 → 黒色 腹部 → 白色
 全シ 褐色
 体色 → 淡色 肌 → 黒色

腹白黒色毛 (black-and-tan) a⁺a⁺
 褐色毛 (brown) bb
 淡色毛 (dilute) dd

頭斑 (head dot)
 ベルリン斑 (Berlin blaze)

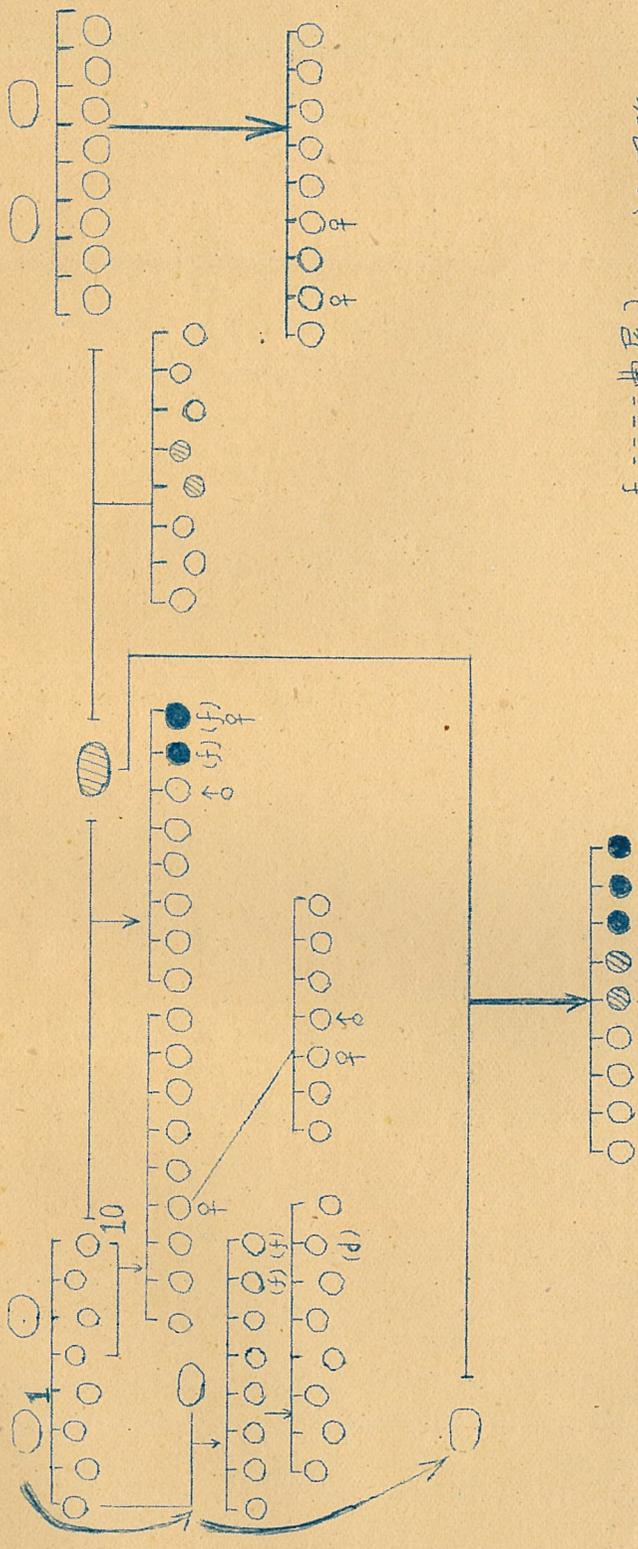
赤頭部、ミ小斑が表レル
 顔面 > 腹部 > = 斑が表レル

変異因子 ----- 之れ自体、形質の表現、興味が感ずる主因子と組んで主因子の働き程度に変更を加ふるもの

致死因子 ----- 或々突然変異因子はホモになる時その10作の生存機能を妨げこれを殺す場合にあらはのよう因子をいう

- o → 生殖不能
- △ → 不完全致死因子
- ×× → 完全致死因子

ハツカネズミの遺伝



突然変異種
 }
 曲尾型
 矮型
 白色
 灰色
 黑色

本にして十日後に見たが、この水でさえもどのちらがシテメ草
 が通りです。この限定小の国内に於ての布は付て四に示す
 には分らないが、この四(4)が解る様に地理的に重要な意味を持つてい
 ます。

(3) シテメン草の群落



小波瀬海岸の植生図 B図

B図で介る様にシテメン草
 は例外なく最も塩(saline
 spot)に接近して生じかつ他
 の植物と混合する事がありま
 せん。シテメン草の群落の外
 側は多くの場合ハマサジの
 群落帯状に現れ、ハマゴウ
 最上部分はハマサジの群落
 下に潮退し、潮退時にシテ
 下状態に於てはシテメン草
 一特長を示す。シテメン草
 我々は水面下に潮退時に於
 ては全草が透圧の浸透圧
 測定法による測定法と乗結
 により亦める牙法とが有り
 による牙法で浸透圧の実験
 により亦める牙法とが有り
 による牙法で浸透圧の実験
 により亦める牙法とが有り

(4) 浸透圧

測定法には、原形質分離に
 による測定法と乗結とが有り
 により亦める牙法とが有り
 による牙法で浸透圧の実験
 により亦める牙法とが有り

ます。我々は初めに原形質分離
 しました。この水は五回もくり返
 敗に帰しました。

原形質分離による測定法

蔗糖溶液を5—7—9—11—13%を作りこの水にシテメン
 草の表皮をはがして30分漬けておいてどの溶液の表皮が、
 原形質分離を起しているかを見ます。1mol 溶液の持つ浸透
 圧 22.7気圧に相当するのでもして7%(2mol)溶液のが原形質分
 離を起していたとしたら $22.7 \times 0.2 = 4.54$ (気圧) の浸透圧である

“アカザ”

凍結降下度 1.6 $12.03 \times 1.6 = 19.248$

故にアカザの濃度は19.248気圧の浸透圧に匹敵する。

凍結降下度 4.3 $12.03 \times 4.3 = 51.729$

故にシチメン草の濃度は51.729気圧の浸透圧に匹敵する。

“ハママツナ”

凍結降下度 2.75 $12.03 \times 2.75 = 33.0925$

故にハママツナの濃度は33.0925気圧の浸透圧に匹敵する。

植物名	氷点降下度	浸透圧
アロエ	-0.14℃	1.684
龍舌ラン	-0.52	6.255
ハマオボコ	-1.12	13.473
ミシマサビ	-1.72	20.691
砂糖大根		15~20
玉ねぎ		15~20
塩生植物		100.00
アカザ	-1.60	19.240
七面草	-4.30	51.729
ハママツナ	-2.75	33.0925
ハマサシ	-2.49	29.954

浸透圧の比較

シチメン草の浸透圧はアロエに比すと40倍も高い浸透圧を持っていることがわかった。

この51.729という数値によって、我々が初めにかけていた疑問即ち満潮時において全草水面下に没してしまいが、海藻ではない、しかし成育している。これが解決されたのである。

参考文献

採集と飼育 四月号

郷土の貝

2年 桜田弘泰
杉江正好

て生 果、天、原、別に
 った 結、土、原、別に
 作ら した、郷、土、原、別に
 を施 した、郷、土、原、別に
 群落 適、我、を、こ
 につ 合、年、が、島、を、こ
 合年 合、年、が、島、を、こ
 リ永 永、と、馬、を、こ
 が物 物、を、こ、馬、を、こ
 生物 物、を、こ、馬、を、こ
 なる の、を、こ、馬、を、こ
 々れ 々、を、こ、馬、を、こ
 色こ 色、を、こ、馬、を、こ
 に合 合、を、こ、馬、を、こ
 内合 内、を、こ、馬、を、こ
 境場 境、を、こ、馬、を、こ
 の環 環、を、こ、馬、を、こ
 っの っ、を、こ、馬、を、こ
 一し 一、を、こ、馬、を、こ

た、つ、き、か、集、で、
 立、大、リ、採、集、で、
 が、目、の、ト、ガ、海、
 富、な、的、オ、オ、の、
 豊、な、的、オ、オ、の、
 が、比、較、的、オ、オ、の、
 類、が、比、較、的、オ、オ、の、
 程、は、バ、カ、カ、田、
 の、サ、で、バ、カ、カ、田、
 貝、の、側、は、バ、カ、カ、田、
 は、ム、ラ、海、で、バ、カ、カ、田、
 島、内、海、で、バ、カ、カ、田、
 馬、カ、カ、田、
 ア、コ、ヤ、カ、カ、田、
 府、な、カ、カ、田、
 長、た、カ、カ、田、
 白、い、カ、カ、田、
 貝、は、少、な、か、

一、し、分、府、島、に、又、美、も、イ、出、は、別、
 港、の、長、馬、島、



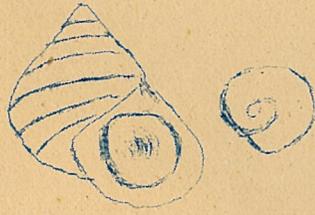
ベニガイ



アコヤガイ



バイ



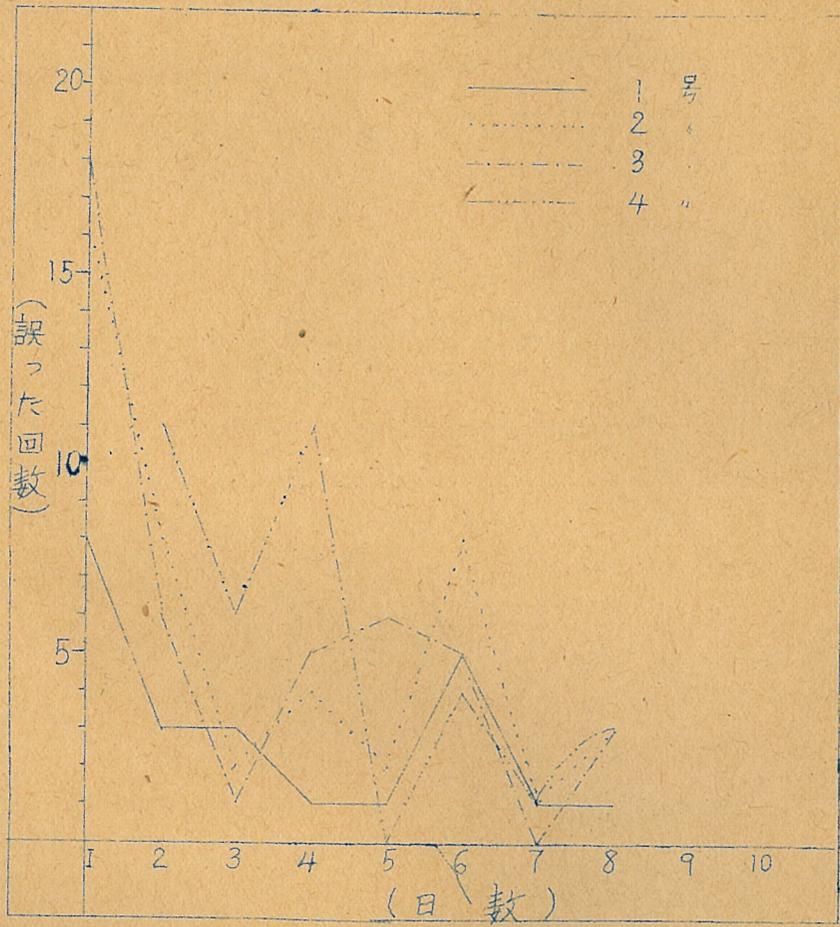
リウテン



ギンタカハマ



ハツカネズミの学習曲線



ライギョ

支那大陸の原産で草魚等と共に日本に移入されましたが、最近至る処の河川、湖沼に見られるようになりました。その獺性といふことを知らぬ人は、食性は河のギャングとして恐るべきに思いますが、特に養魚家にはさらけられています。肉は刺身にするには弾力があり、フグの味がありますが寄生虫(皮膚にコブを作る)の媒介をするので生食は避けた方が良いでしょう。

シチメン草

アカガ科の海浜植物で秋になると紫紅色から赤色に変る性質があるので七面草の名があります。塩分のあるところだけにしか生育しない生態的に面白い植物です。最近絶滅に類して日本全国で一ヶ所わずかに曾根一対田海岸に残っていますが元も干拓事業等で年々減少しつつあり、何等かの保護の手を下さすことが望まれます。

デンチ草 *Marsilea quadrifolia*

四つ葉のクローバーの様な形をしていますがシダ植物です。水の中に生えるシダ植物として、一寸珍しい存在です。葉の形が田の字の形をしているというので田字草の名があります。隠花植物ですから花は咲かず大胞子、小胞子二種類の胞子によって繁殖します。

カブトガニ *Tachypleus tridentatus*

クニという名前があるが分類上では劍尾類に属し甲殻類よりはクモ類に近い仲間である。世界に二種しかおらず日本では瀬戸内海沿岸に多数産し、天然記念物に指定されている。九州では瀬戸内海の延長である曾根一対田の海岸に産す。海岸の砂中に産卵する。子は三葉虫に似ている。

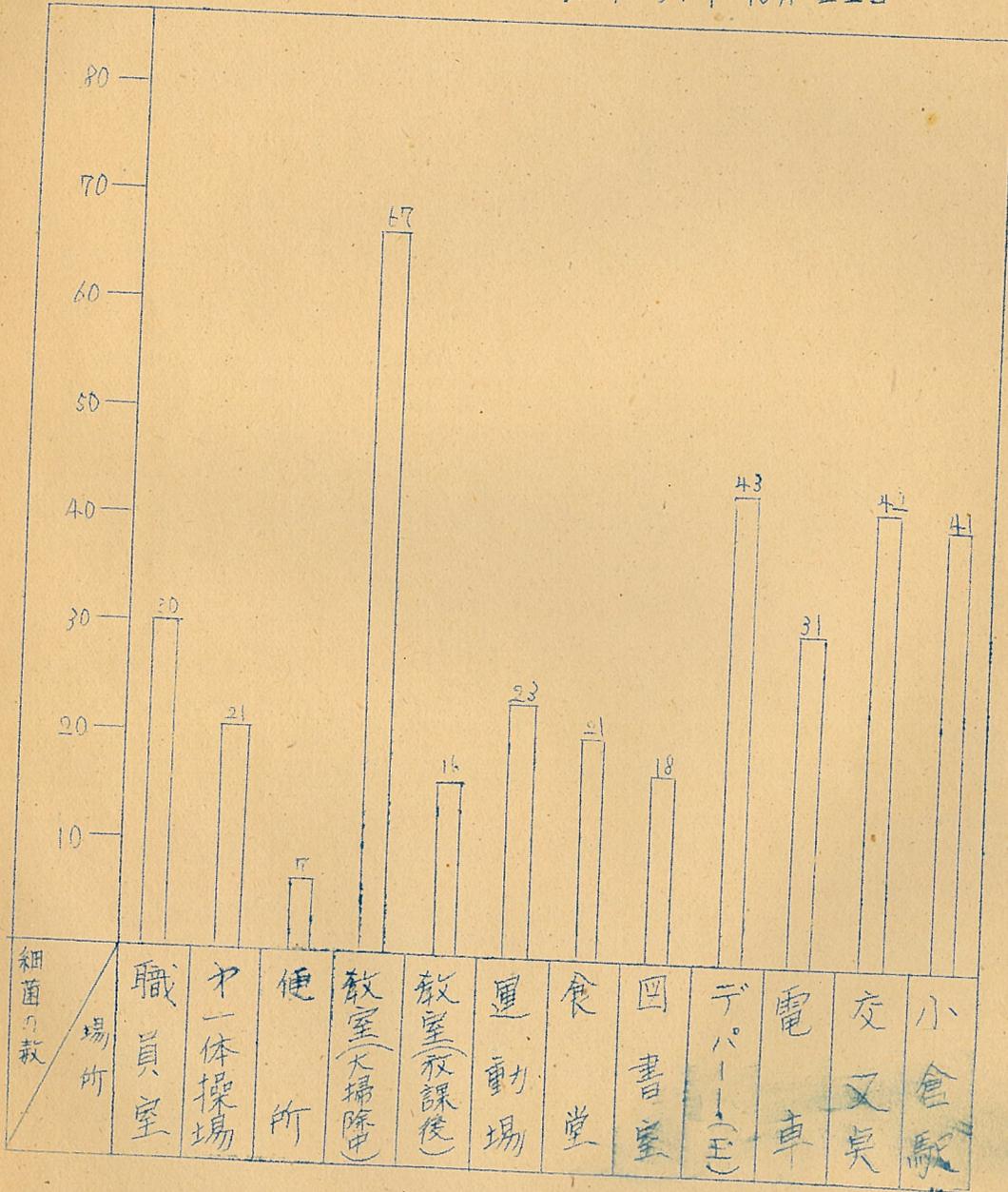
モウセンゴケ *Utricularia rotundifolia*

日本原産の食虫植物の中で最も普通のもので山中の養分乏しい湿地に生ずる。葉面に赤色の腺毛が多数あり、此の腺毛が寄生して居る所は赤毛艶を数いた様に見えるので此の名が

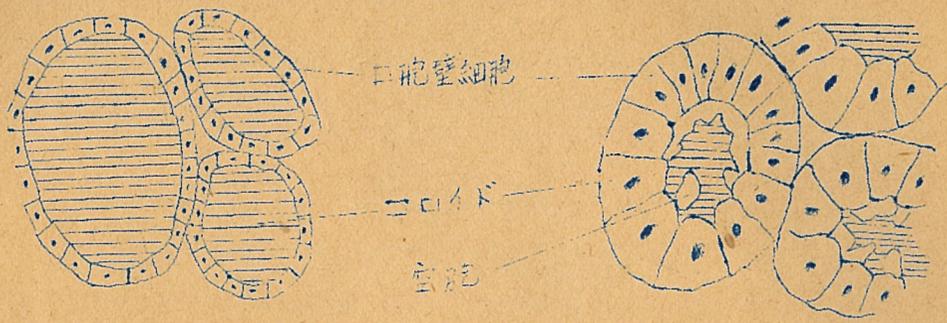
にフラスコに入水、湯煎鍋で55°Cで1時間加熱し、次に1時に
 間煮沸する。この水を濾過して、その液を冷し、次に1時に
 その中に1gの食塩を加え、一度煮沸する。

細菌の測定

昭和31年10月22日



びない腺の
 比として状
 に小し甲に
 因は含有性
 ノは含質増
 多腺を大増
 の腺原謂肥
 のコソ所の
 の為毛、胞
 常のルす細
 正と本乳壁
 は、腺の胞
 於大甲認、
 腺に下と因
 た、腺に量
 った、腺に
 甲、口少才
 か、口少才
 分は、口少
 れで、口少
 ら腺胞腔此
 め腺胞腔此
 め腺胞腔此
 どの腺胞腔
 どの腺胞腔
 どの腺胞腔
 どの腺胞腔



右の図は甲状腺の細胞、左の図は甲状腺の細胞

下魚体前葉に於ては、甲状腺は、ホルモンの分泌を抑制して、甲状腺の機能を低下させる。

(考察) 甲状腺の機能は、ホルモンの分泌によって調節される。甲状腺の機能は、ホルモンの分泌によって調節される。甲状腺の機能は、ホルモンの分泌によって調節される。

次に各花型別に結実の様子を観察した。次の表はその記録をまとめたものである。

各花の結実の割合

観 察 の 時 期			花 型	調 べ 数	落 扶 数	結 実 数	結 実 の 割 合
第 一 回	二十九年	7月 31日	A	16	0	16	100 %
		8月 7日	B	6	2	4	78
			C	8	8	0	0
第 二 回	二十九年	8月 20日	A	30	6	24	80
		9月 3日	B	20	13	7	35
			C	6	6	0	0
第 三 回	三十年	7月 20日	A	13	0	13	100
		8月 6日	B	7	3	4	57
			C	13	3	0	0
第 四 回	三十年	8月 7日	A	6	0	6	100
		9月 17日	B	8	3	5	63
			C	6	6	0	0
平 均			A	65	6	59	90.8
			B	41	21	20	49.0
			C	23	23	0	0

上の表でわかるように

A型 ----- 約 90 % 結 実
 B型 ----- 約 50 % 結 実
 C型 ----- 0 % 結 実

